

LPS: 2 ng/mouse であった。② いずれの LPS も, i.p. 投与よりも, i.g. 投与が低い最小致死量を示した。③ LPS は, i.g. 投与の最小致死量で有意に肝 5HT の増加(血小板の肝への集積)をもたらした。【考察】これらの結果は、口腔組織で產生された LPS は容易に口腔組織以外の遠隔臓器に到達して炎症や免疫反応を誘導することを示す。口腔細菌が產生する LPS には, *E. coli* LPS と同等の生物活性をもつものも知られており、これらの LPS が全身疾患の原因となる可能性が予想される。

本実験系は、これを研究する良いモデルになると思われる。

9. 仙台市立病院における顎矯正手術の臨床統計的考察

小枝聰子, 沼田政志*, 笠原毅弘, 佐藤英明**, 長坂 浩, 川村 仁, 菅原準二*** (東北大学大学院歯学研究科顎顔面口腔外科学講座顎面口腔外科分野, *仙台市立病院歯科, **自衛隊中央病院, ***東北大学大学院歯学研究科発達加齢保健歯科学講座発達咬合形成学分野)

今日、高次歯科医療機関として病院歯科の果たす役割は重要である。今回われわれは、1989 年から 1998 年までの 10 年間に、地域医療の中核的役割として仙台市立病院で施行した顎変形症症例に対し、臨床統計的観察をおこなうとともに、病院歯科の役割について考察した。対象) 1989 年 1 月より 1998 年 12 月までの 10 年間に、仙台市立病院で施行した顎変形症症例 87 例(男性 24 例、女性 63 例、手術時平均年齢 21.7 歳)。結果) 術式別の症例数、平均出血量、平均手術時間、平均顎間固定期間は以下の通りであった。両側下顎枝矢状分割術(BltSSRO)65 例, 259 ml, 118.3 分, 5.9 日。SSRO+下顎骨垂直骨切り術(IVRO)9 例, 187.2 ml, 88.8 分, 15 日。BltSSRO+オトガイ形成術(genoplasty)3 例, 273.3 ml, 132.7 分, 6.3 日。BltIVRO 7 例, 28.8 ml, 57.6 分, 20 日。IVRO+IVSSRO 1 例, 20 ml, 60 分, 33 日。BltIVRO+genoplasty 1 例, 300 ml, 106 分, 20 日。右側上顎歯槽部骨切り術(PMO)+BltSSRO 1 例, 400 ml, 218 分, 6 日。平均入院期間は 16.8 日であった。考察) 以上のように、顎矯正手術は、病

院歯科での対応も十分に可能であり、開業歯科医院、病院歯科、大学病院の連携をはかりつつ、地域医療においての病院歯科の中核的役割は、今後、ますます重要なになってくると思われる。

10. 全身疾患と口腔症状に関する診断学的研究 — 第 9 報 全身疾患と顎骨骨髓炎の連関について —

佐藤しづ子, 阪本真弥, 栗原直之, 犬飼 健, 小野寺大, 飯久保正弘, 駒井伸也, 菅原由美子, 古内 寿, 庄子憲明, 笹野高嗣 (東北大学大学院歯学研究科口腔病態・生体防御学講座口腔診断・放射線学分野)

近年、高齢化社会の急速な進行を背景に、全身疾患有する顎骨骨髓炎患者の増加がみられる。本研究は、全身疾患と顎骨骨髓炎の連関を明らかにすることを目的に、全身疾患の有無による顎骨骨髓炎の CT 画像所見の差異について検討した。

【対象】 臨床所見、画像所見および病理組織学的所見を照合して顎骨骨髓炎と診断された 33 症例(性別: 男性; 24 名、女性; 9 名、年齢: 23 歳~83 歳、平均年齢: 61.5 歳)。

【結果】 1. 顎骨骨髓炎 33 症例の 85% が全身疾患有していた。2. 全身疾患の内訳は、消化管潰瘍、高血圧、糖尿病、頭頸部腫瘍の放射線治療後などであった。3. 骨髓炎の波及部位は、全身疾患のない患者では、局所あるいは下顎骨骨体部にとどまっていたが、全身疾患のある患者では、限局する症例は少なく、下顎骨骨体部からさらに下顎枝など広範囲に波及していた。4. CT 画像パターンは、全身疾患のない患者では骨溶解型と骨硬化型がみられたが、全身疾患のある患者では、混合型、骨溶解型、腐骨型、骨硬化型、骨変化なしの順で多岐にわたっていた。5. 全身疾患のある患者では、全身疾患のない患者に比較して、骨皮質の断裂および軟組織への波及のある症例が多く、骨膜反応は少ないとされた。

【まとめ】 全身疾患は、顎骨骨髓炎の進展や病態に深く係わっていることが示唆された。顎骨骨髓炎の診断や治療において、全身疾患を十分に考慮することが重要と考えられた。